

「水曜サロン with 赤堀会長」第6期 第7回（通算82回）

子どもを主体とした教育の推進に向けて一教員・指導主事時代の経験を踏まえ

1. 内容

○ICTが普及しても変わらぬ教育課題～教員時代～

- ・多様な子供たちの実態を把握し、適切なタイミングと手法で指導することの重要性
- ・子供たちが主体的に学び、対話的な活動を通じて自己の学びを深めることの大切さ
- ・先生は自分のことをよく見ている、という関係性
- ・子供を軸にして考えることの難しさ

○ICTの活用の可能性に対する驚きと感動～指導主事時代～

- ・民間事業者の働き方や国・自治体の考え方を知る

○現在の課題認識

- ・ICT利活用に関する自治体間、学校間、教員間の格差
- ・ビューワの不統一
- ・ID、アカウントの連携
- ・ゼロトラスト、ネットワーク環境
- ・教育データ利活用の促進
 - ダッシュボードの実装に目が行きがちだが、課題解決に向けた可視化という観点が重要
 - 課題整理・事実可視化・実行評価・仮説検証のサイクルを回すことが必要

○今後の展望

- ・生涯使えるIDの設計や、大規模データの利活用など、民間企業にはすでにさまざまな技術と事例がある。企業による伴走型での支援が不可欠。

2. 所感

教員と指導主事を経験され、その後民間に転身されたご経験から、ICT活用の重要性と可能性について実感をもって語っていただきました。

ICTが普及しても変わらぬ不易な教育課題として挙げられたことは、1人1台端末の普及とともに解決の方向に確かに歩みを進めています。もちろん、現状は自治体間・学校間・教員間の格差があるというのはそのとおりだと思いますが、そこには特効薬のようなものはなく、民間事業者も含めたさまざまなステークホルダーの日々の活動と努力の積み重ねが解決に導いてくれるものと思います。

データドリブンの経営という視点で民間企業が、BI（Business Intelligence）ツールやAIを使った可視化や予測を行っている事例のご紹介がありました。学校教育においても、同様にデータドリブンの経営が実現できれば、とは思いますが、まだまだデジタルデータとして分析可能な情報は十分には揃っていないのが現状だと思います。

質疑応答の中で教員のデータ利活用意識についての話がありました。必ずしもデジタルデータとは限らないが、児童・生徒の状況を見たり、教員間で話をしたりすることで、情報としてインプットして判断しており、決してデータ（情報）を軽視していることはないとのことでした。教員のなり手不足が深刻化してきている中、その判断の暗黙知を形式知にしていくことが必要な時代になってきていると思います。教員や児童生徒の日常の行動や思考をデータ化していくことができるようなさらなる

技術の進歩があれば、暗黙知を形式知にできる時代が来るかもしれませんが、それはまだまだ先のことでしょうか。

應田様、たくさんの示唆に富むお話をいただき、ありがとうございました。